



Tシャツには船橋4Hクラブのロゴが。4Hとは、Hand, Head, Heart, Healthの頭文字

豊田大輔

2017年度「千葉なし味自慢コンテスト」農林水産大臣賞受賞者
船橋市農業青年クラブ(通称・船橋4Hクラブ)46代会長

「ゴクのある梨」を作り続けて 「船橋のなし」を広めたい

打ち込んで、そこから千葉大学園芸学部に進みました。梨栽培を基礎からみっちり学んで、家業に就農。父や祖父と一緒に働き始めました。

栽培法をめぐって父と意見がぶつかることも。それでも必ずトライさせてくれるのがうれしい。

梨農家をしていて大変なのは、毎年のように気候が変わること。去年は収穫期に雨が続き、



父・和彦さん(右)と梨園で。大穴北地区に6か所の梨畑をもつ

とよだ・だいすけ●1991(平成3)年1月12日、船橋市生まれ。船橋市北部、大穴北地区で生まれる「豊田梨園」の4代目。昨年8月、「千葉なし味自慢コンテスト」で最優秀賞となる「農林水産大臣賞」を受賞。2012年に同賞に輝いた父・和彦さんに続く、親子2代での快挙となった。30歳以下の農家のグループ「船橋市農業青年クラブ(通称・船橋4Hクラブ)46代会長として、地域ブランドである「船橋のなし」のPRや地域の活性化に力を注いでいる。スポーツが好きで、週3日は空手道場に汗を流す。

梨職人の父と祖父が、楽しそうに働いていたので、幼いころから販売や収穫を手伝うのが楽しかった。

生まれたときから、梨に囲まれていました。家は曾祖父のころから梨農家を営んでいたもので、幼いころから自然と直売所での販売や収穫のお手伝いをしていました。手伝いは全然苦じゃなかったですよ。直売所で長年のお客さんにかわいがってもらっていたので、むしろ楽しかった。

一緒に働いている父(53歳)と祖父(79歳)は、文字通り「梨職人」です。朝から食卓で梨をひたすら食べながら、味のことや天候のことを熱心に話し合っている。頭の中は梨のことばかりです。祖父は、いまでも現役バリバリ。「外は暑いから」と引き止めても、炎天下の中、梨畑に出かけて行って帰って来ない。

祖父と父がいつも楽しそうに働いていたこともあって、「ぼくもいずれは梨農家として働きたい」と思うようになりました。高校時代は大好きなサッカーに

今年は今年で猛暑日の連続。毎年が異常気象のようなものなので、新しい病気も出てきています。梨はとても繊細な果樹。ちよつとした気候の変化で出来が大きく変わってしまう。毎年、梨作り1年生の気持ちで梨に向き合っています。

祖父や父とは、いつも梨のことばかり話し合っていて、栽培方法を巡って意見がぶつかることも。でも父は、ぼくの意見を無下に退けたりせず、限られた範囲でもトライさせてくれる。それがうれしい。

仮に自分の方法が失敗しても「何が悪かったのだろう」「次はどうしたらいいんだろう」と真剣に考える。そうやって考えることが、技術の向上につながります。父は「それを見たことか」なんて笑っていますが、その父も同じように祖父に鍛えられたみたいですよ。

親子2代での農林水産大臣賞受賞に、長年のお客さんが泣いて喜んでくれた。

梨栽培でいちばん大事な

は、収穫のタイミング。子どもころ、祖父や父に「どんなの獲ればいいの?」と訊くと「光ってるものだよ」と教わりました。つやがあるという意味ですが、経験を積まないとわからない職業的な感覚です。

梨がいちばんおいしくなるのは、年に1日か2日だけ。そこを見極めて収穫しないとイケない。とても難しい作業です。

それが少しずつわかり始めたので、昨年、「千葉なし味自慢コンテスト」に自分の名前で「幸水」を出品しました。何度も出品して、いずれ賞を取れたらと考えていたら、1度目で農林水産大臣賞に選ばれてしまった。びっくりしました。本当にラッキーです。

6年前の父の「豊水」に次ぐ、親子2代での受賞。これには家族よりも、お客さんが喜んでくれました。

「豊田梨園」で収穫された梨は、そのほとんどを直売所で売っています。つまりご近所さんや、その知り合いという顔が見えるお客さんに食べていただいています。50年前から代々買っ



農林水産大臣賞のカップには親子2代の名が

ていたお得意さんもいます。

そんな方々が、受賞をものすごく喜んでくれました。受賞の一報が届いたとき、直売所に来ていた長年のお客さんが泣き出したり、近所の方が「今度は息子がやったか!」と飛んできた。

賞を目標にしているわけではないですが、改めてウチの梨園がいいお客さんに恵まれて続いていたことが実感できました。

今後の目標は、とにかくおいしい梨を作り続けていくこと。甘いのは当たり前、もつともつと食べたくなるような「ゴクのある梨」を作り続けて、お客さんに喜んでいただきたいと思います。